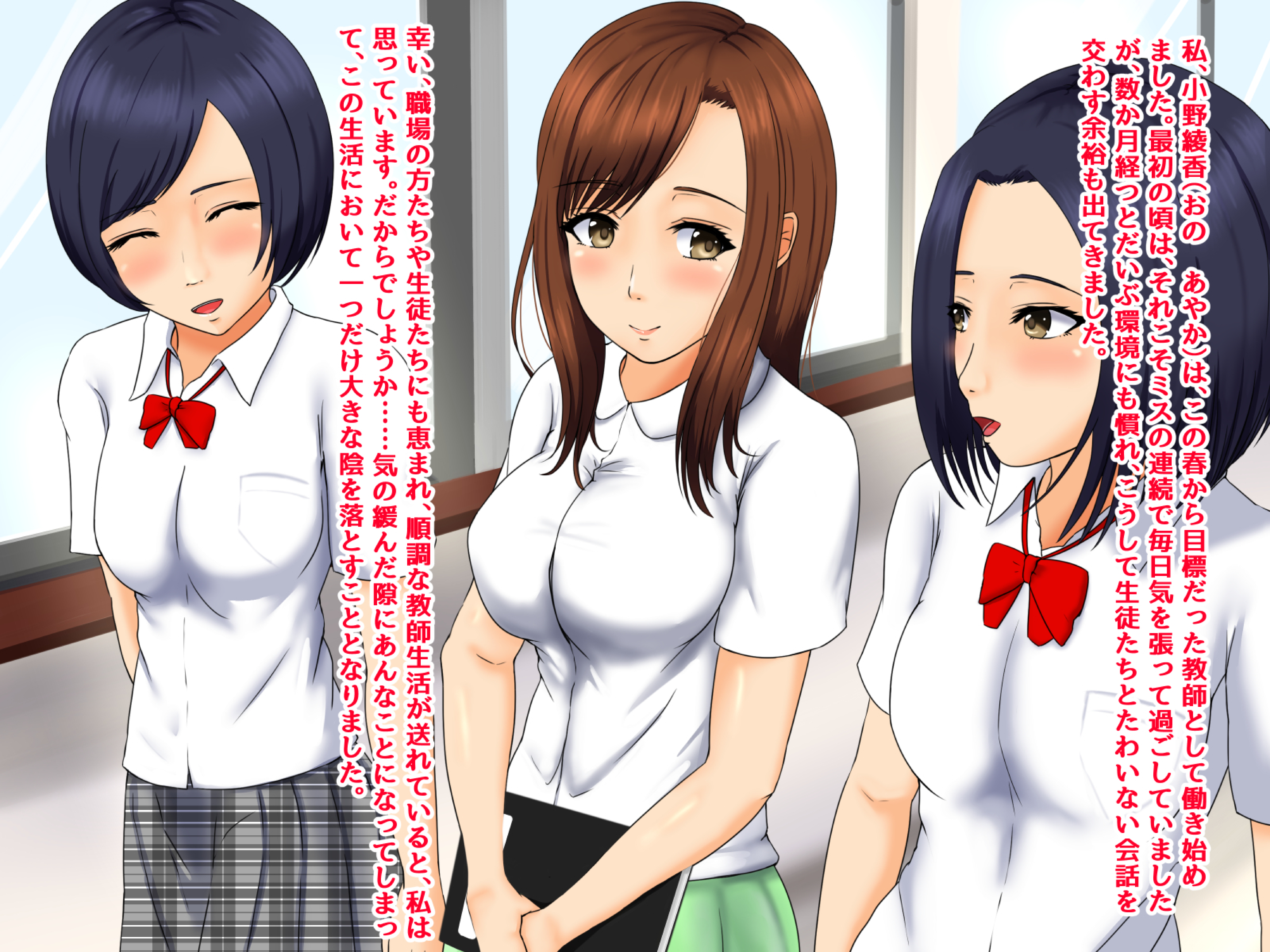
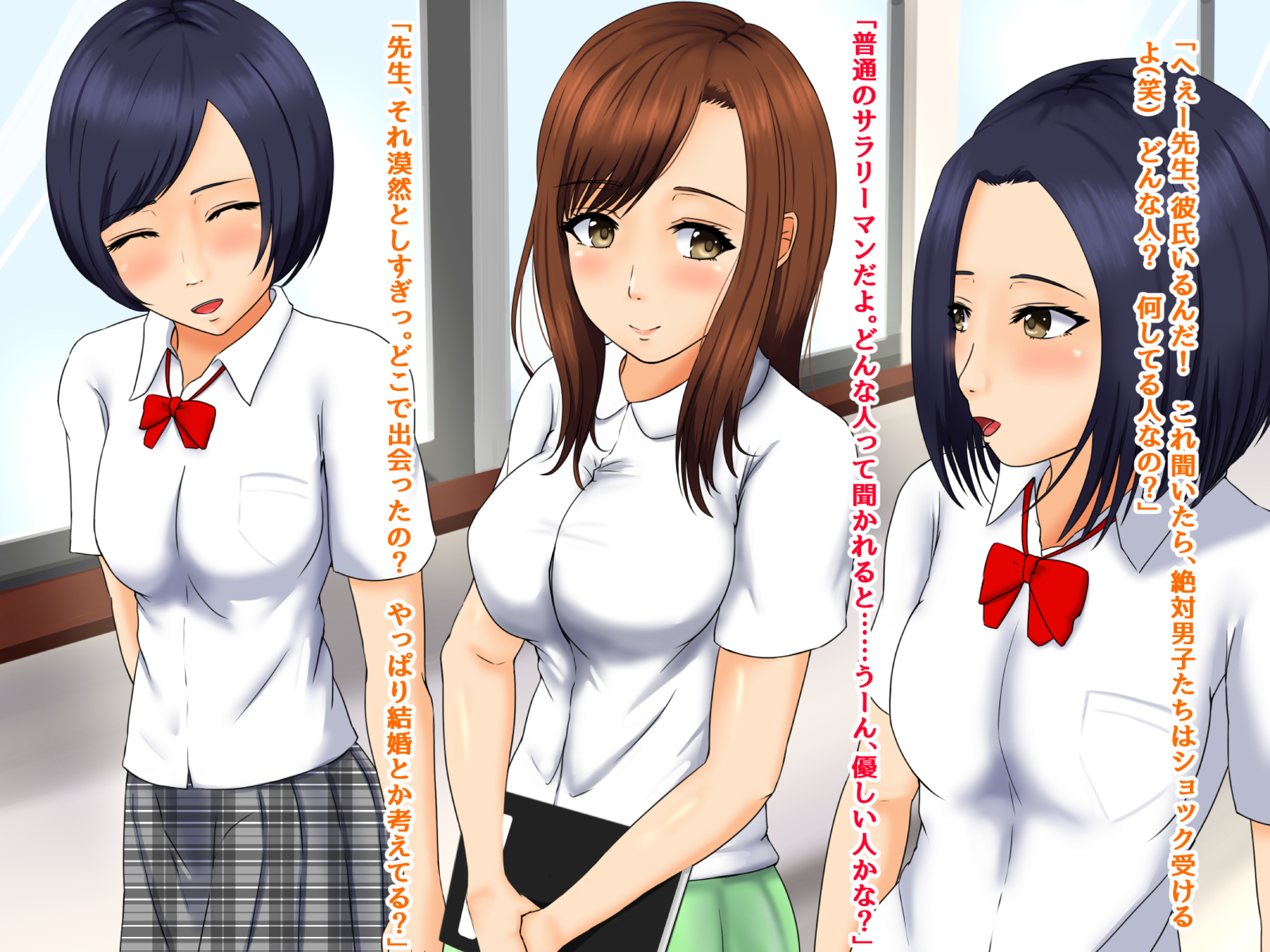
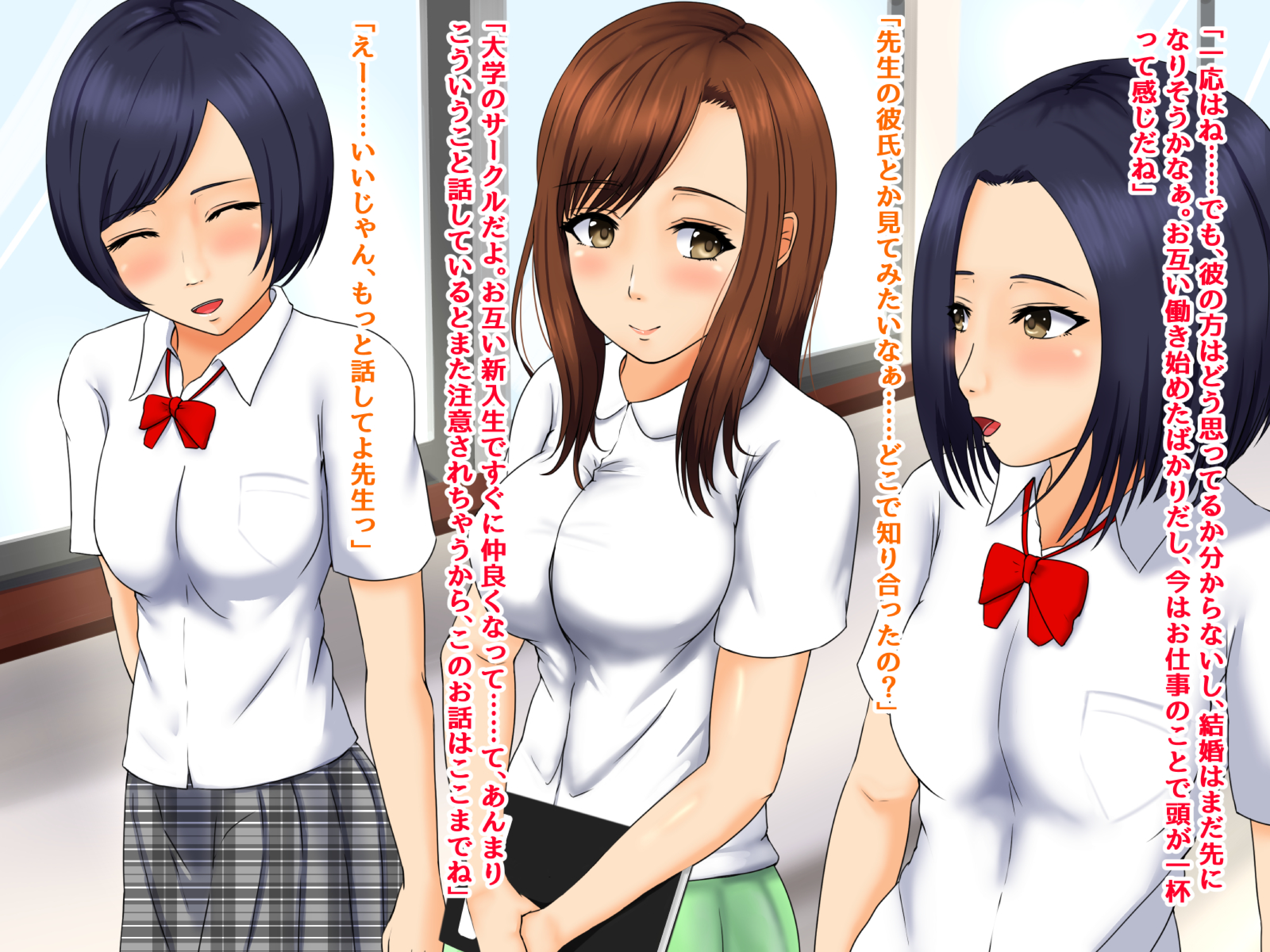
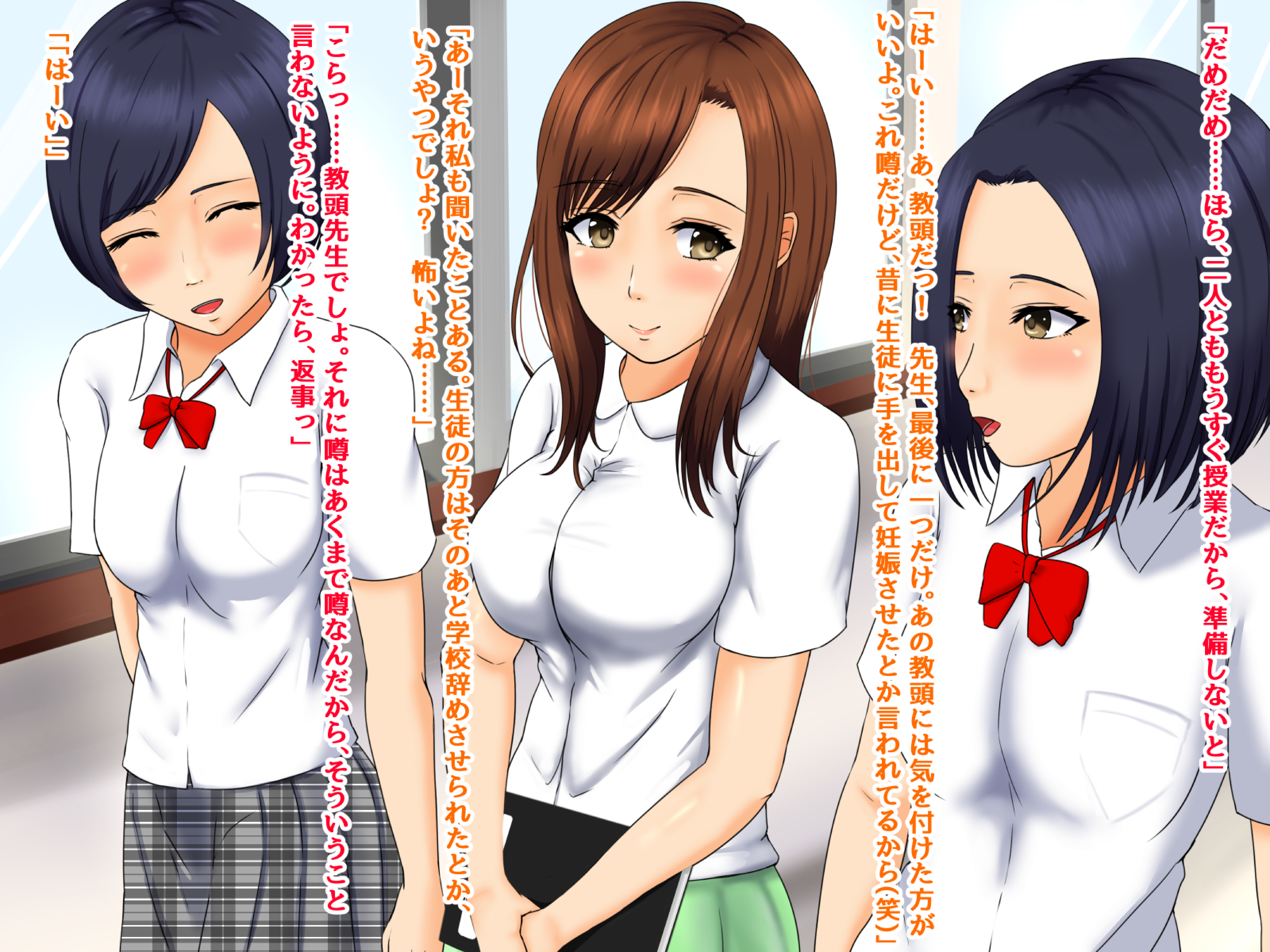
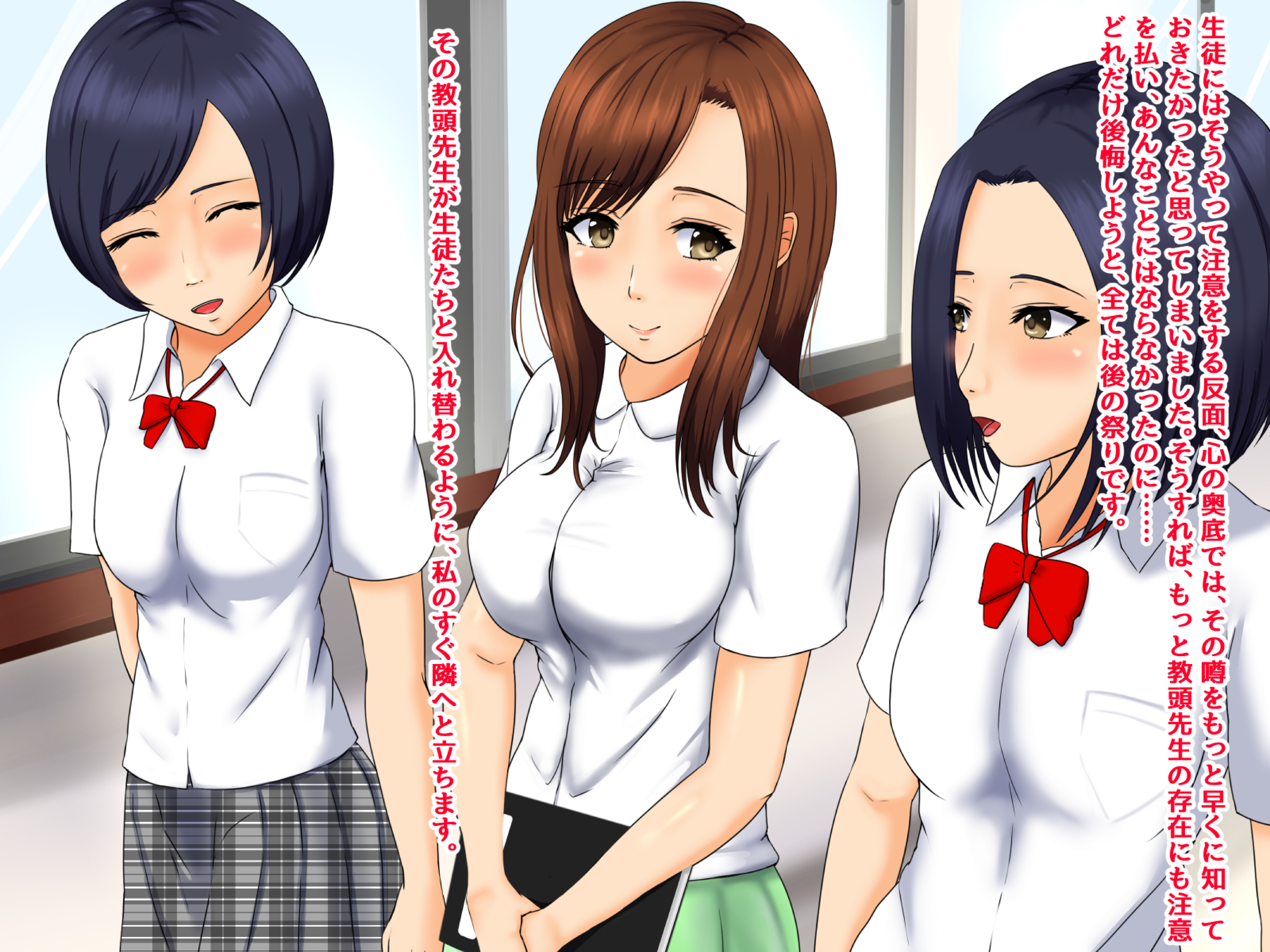

私、小野綾香(おの　あやか)は、この春から目標だった教師として働き始めました。最初の頃は、それこそミスの連続で毎日気を張って過ごしていましたが、数か月経つとだいぶ環境にも慣れ、こうして生徒たちとたわいない会話を交わす余裕も出てきました。
幸い、職場の方たちや生徒たちにも恵まれ、順調な教師生活が送れていると、私は思っています。だからでしょうか……気の緩んだ隙にあんなことになってしまって、この生活において一つだけ大きな陰を落とすこととなりました。


「へぇー先生、彼氏いるんだ！　これ聞いたら、絶対男子たちはショック受けるよ(笑)　どんな人？　何してる人なの？」
「普通のサラリーマンだよ。どんな人って聞かれると……うーん、優しい人かな？」
「先生、それ漠然としすぎっ。どこで出会ったの？　やっぱり結婚とか考えてる？」


「一応はね……でも、彼の方はどう思ってるか分からないし、結婚はまだ先になりそうかなぁ。お互い働き始めたばかりだし、今はお仕事のことで頭が一杯って感じだね」
「先生の彼氏とか見てみたいなぁ……どこで知り合ったの？」
「大学のサークルだよ。お互い新入生ですぐに仲良くなって……て、あんまりこういうこと話しているとまた注意されちゃうから、このお話はここまでね」
「えー……いいじゃん、もっと話してよ先生っ」


「だめだめ……ほら、二人とももうすぐ授業だから、準備しないと」
「はーい……あ、教頭だっ！　先生、最後に一つだけ。あの教頭には気を付けた方がいいよ。これ噂だけど、昔に生徒に手を出して妊娠させたとか言われてるから（笑）」
「あーそれ私も聞いたことある。生徒の方はそのあと学校辞めさせられたとか、いうやつでしょ？　怖いよね……」
「こらっ……教頭先生でしょ。それに噂はあくまで噂なんだから、そういうこと言わないように。わかったら、返事っ」
「「はーい」」


生徒にはそうやって注意をする反面、心の奥底では、その噂をもっと早くに知っておきたかったたと思ってしまいました。そうすれば、もっと教頭先生の存在にも注意を払い、あんなことにはならなかったのに……
どれだけ後悔しようと、全ては後の祭りです。
その教頭先生が生徒たちと入れ替わるように、私のすぐ隣へと立ちます。

「おはようございます、小野先生」
「おはよう……っ、ございます、教頭先生」
ビク
教頭先生はすぐさま私のお尻をわし掴みにしてきました。にこやかな笑みとは正反対のいやらしい手つきで、何度も何度ももみほぐしてきます。
もみ
もにゅ

「先ほどまで会話が盛り上がっていたようですが、何についてお話になっていた
のですかな？」
「他愛もないことです……」
「ほう……それで何なのです？」
一層力を込められた手つきに、私は先ほどの彼氏についてのことを話さざるを
得ませんでした。その間も、ずっとお尻は揉まれたままです。
しかし、私はそれを拒否することはできません。
もにゅ
ビク

「あぁ……なるほど。生徒たちも色恋沙汰に興味をもつ年頃ですからね。小野先生のような美人な方の恋人の有無が気になるのも当然です。私もいつかはその彼氏さんにお会いしたいものですな。大事な恋人がちゃんと仕事についていけているか心配でしょうし……ね？」
「いぇ、そんな……んっ……教頭先生にそこまでしていただくわけには」
もにゅ
「いえいえ、そんな遠慮なさらず。一夜を共にした仲ではないですか」
ビクッ
「それはっ！」
もみ♡
そう……教頭先生が私にこのようなことをするのも、それに対して、私が抵抗できないのも、その「一夜の出来事」が関係していました。

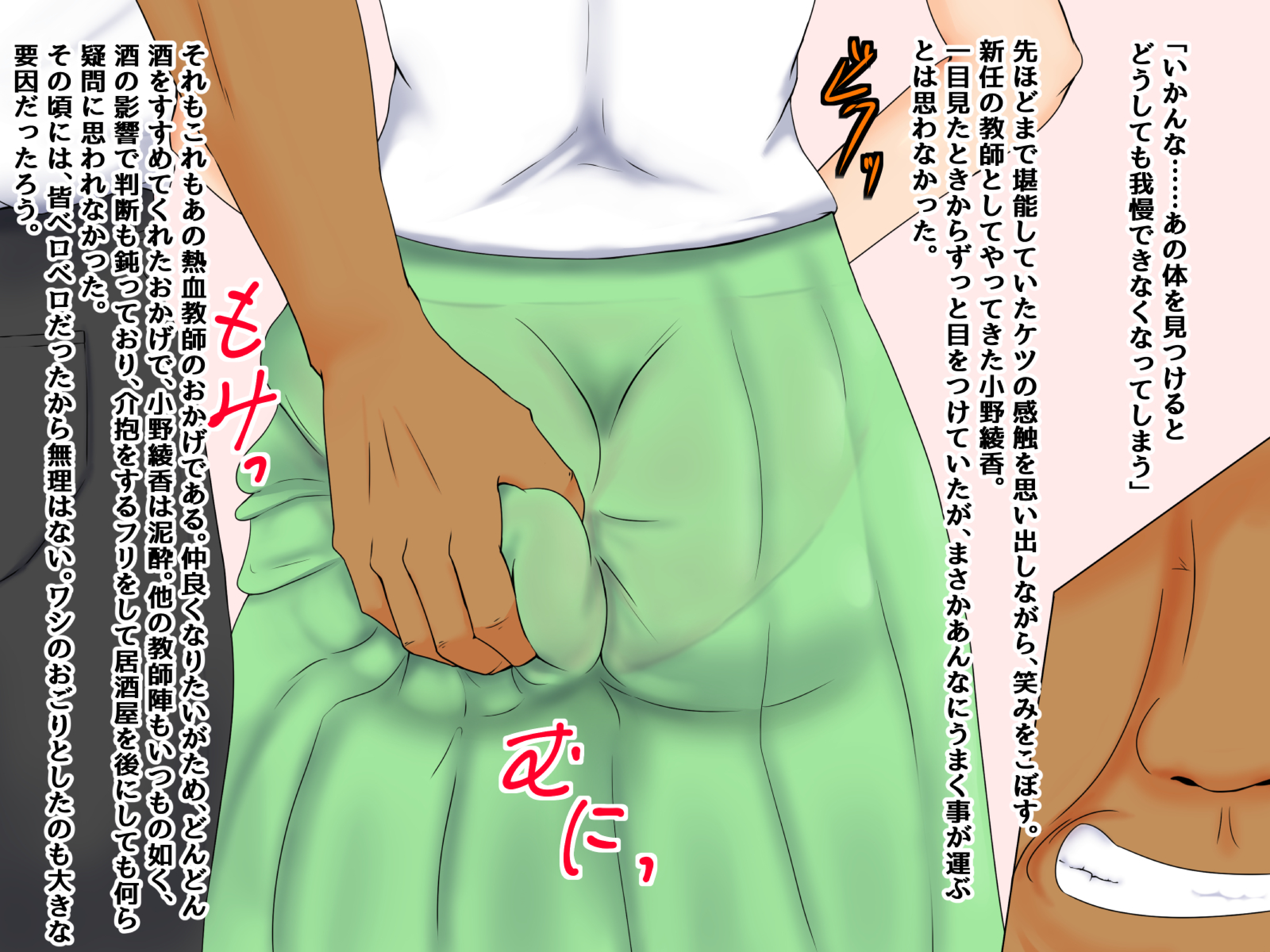
そのときのことは正直記憶があやふやなのですが、覚えていることと言えば、新任の私への歓迎会が開かれたこと。そこで体育教師の藤田先生に何度もお酒を勧められたこと。そして、最終的に泥酔してしまったことです。
そんな私を自宅まで送り届けてくれたのが、教頭先生なのですが……
私はその教頭先生を相手にセックスをしてしまったようなのです。
しかし、そのときの記憶は本当にあいまいで、私も教頭先生にそのときの動画を見せられるまで信じることができませんでした。
ビクッ
もみ♥
もにゅ

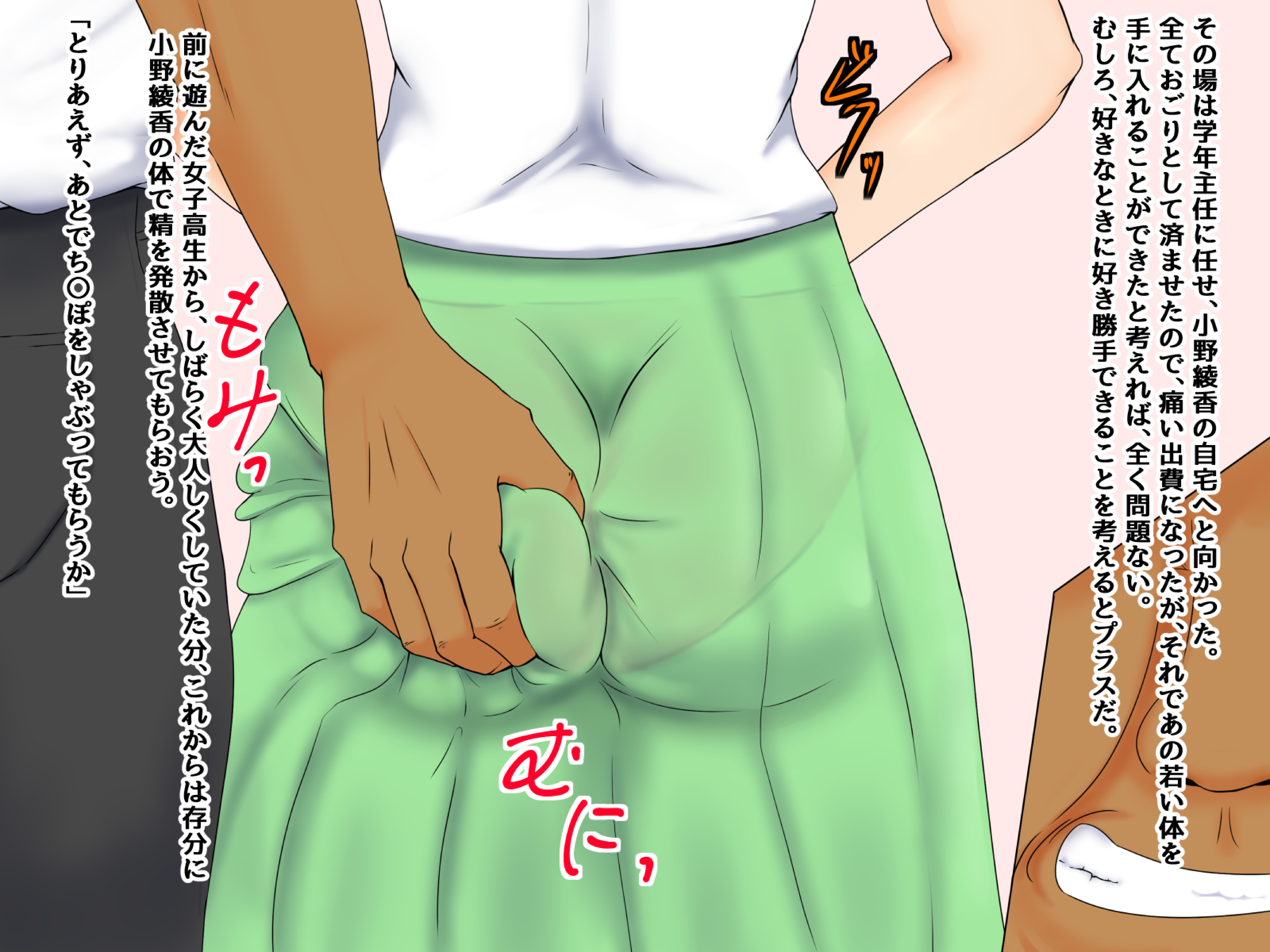
その動画自体、どうやって録られたのかわかりませんが、あれは確かに私でした。
そして、その動画の中の私はいやらしく、
「あっ♥ いい♥ きて！ 膣内に出して！」
そう懇願していました。そして、教頭先生は私の願い通り、思いきり中出しをしたようです。彼氏ともほとんどしない中出しをよりにもよって、職場の上司である教頭先生にされてしまうなんて……
そして、その動画を盾に、教頭先生は何度も私に関係を迫ってきました。
パチュ
パチュ
パチュ
パチュ
ブルン
ブルン
もにゅ

「彼氏にこのことを知られたくないだろう？」
その一言とともに動画を再生されてしまうと、私は逆らうことができませんでした。その一夜以降、彼氏には内緒で、私は何度も教頭先生のモノを受け入れています。
あの動画さえなければ、こんなことにもならなかったはずなのに……
そして、執拗にお尻を揉みしだく手は一向に止む気配がありません。
ビク
もみ♡
もにゅ

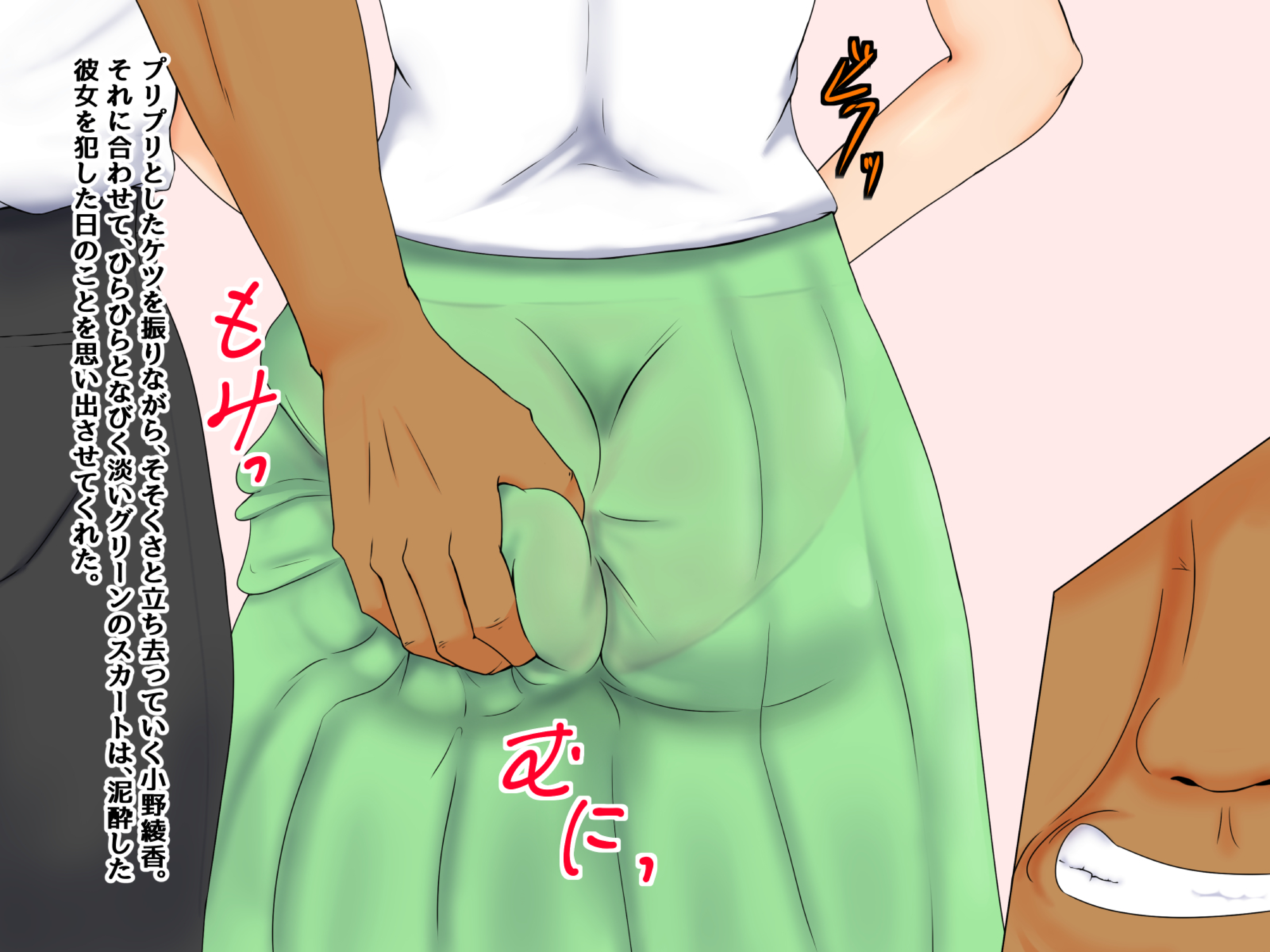
「あの……教頭先生、そろそろ私も移動しないと……」
「おっと……そうでしたな。いやいや、小野先生のお尻の揉み心地が良すぎて、
つい夢中になってしまいました。やはり、若いと張りが違う」
もにゅ
ビクッ
そんな褒め言葉をもらいますが、全く嬉しくありません。それよりも早く解放
してほしい……頭の中ではそれしか考えられませんでした。
もみ♡

そして、ようやくお尻から手が離れたことに、私は安堵しますが、
「では、続きはいつもの場所で……お待ちしていますよ」
もにゅ
ビク
その一言が私の心に重くのしかかるのでした。
もみ♡


「いかんな……あの体を見つけると
どうしても我慢できなくなってしまう」
先ほどまで堪能していたケツの感触を思い出しながら、笑みをこぼす。
新任の教師としてやってきた小野綾香。
一目見たときからずっと目をつけていたが、まさかあんなにうまく事が運ぶ
とは思わなかった。
ぐうッ
もみっ
むにっ
それもこれもあの熱血教師のおかげである。仲良くなりたいがため、どんどん
酒をすすめてくれたおかげで、小野綾香は泥酔。他の教師陣もいつもの如く、
酒の影響で判断も鈍っており、介抱をするフリをして居酒屋を後にしても何ら
疑問に思われなかった。
その頃には、皆ベロベロだったから無理はない。ワシのおごりとしたのも大きな
要因だったろう。



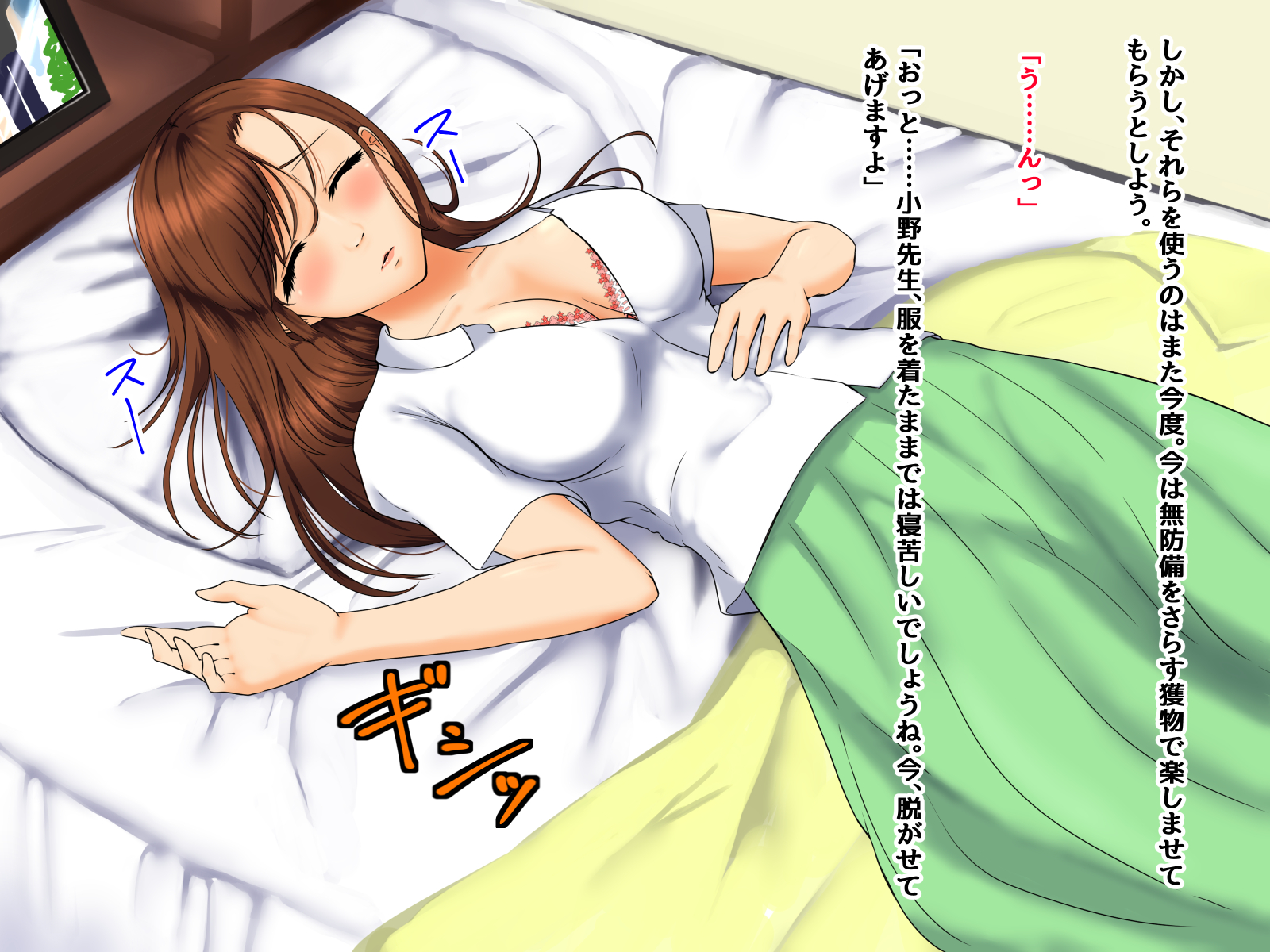
その場は学年主任に任せ、小野綾香の自宅へと向かった。
全ておごりとして済ませたので、痛い出費になったが、それであの若い体を
手に入れることができたと考えれば、全く問題ない。
むしろ、好きなときに好き勝手できることを考えるとプラスだ。
前に遊んだ女子高生から、しばらく大人しくしていた分、これからは存分に
小野綾香の体で精を発散させてもらおう。
「とりあえず、あとでち〇ぽをしゃぶってもらうか」
もみっ
むに、

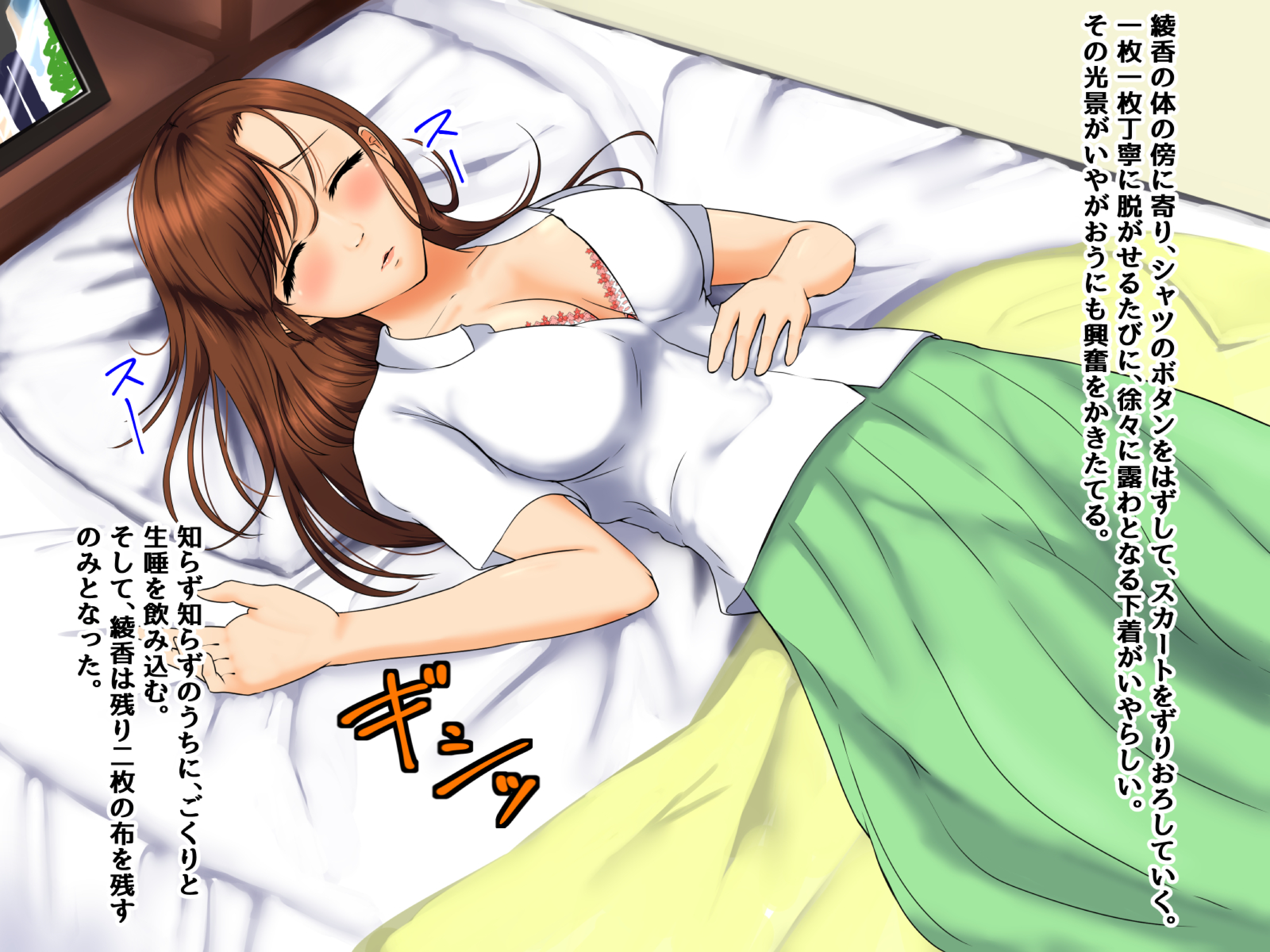

プリプリとしたケツを振りながら、そそくさと立ち去っていく小野綾香。
それに合わせて、ひらひらとなびく淡いグリーンのスカートは、泥酔した
彼女を犯した日のことを思い出させてくれた。
もみっ
むにっ

「よい、しょ……と」
寝息をたてる綾香を背負い、彼女の自宅であるマンションへと向かった。
その後、何とか綾香の住む部屋へとたどり着く。
綾香をゆっくりとベッドへおろし、部屋の中をぐるりと見まわす。
内装はすっきりとまとまっており、綾香の性格を表しているようで好感がもてた。
スー
スー
ギシッ

「どーも、名も知らない彼氏さん……」
綾香の眠るベッドの頭には、二人の男女が仲睦まじい姿で寄り添った写真があった。
これだけの美人である。現在付き合っている恋人がいても、おかしくはない。
そして、その恋人というだけあって、彼氏のほうもかなりのイケメンである。
「いいねぇ……カッコいい男は美人ともやり放題で」
スー
スー
ギシッ

自身の見た目と比較して、その容姿に嫉妬してしまうが、そんな思いもすぐに消え去っていく。なにせ、これからイケメンの恋人を犯し尽してやるからだ。
「いやぁ……本当に小野先生が我が校に赴任してくれてよかった。さすがに、生徒に二度も手を出すのは気が引けたのでね……」
しかし、綾香が来なければ、間違いなくまた生徒に手を出していただろう。現代は、SNSなどの普及により、案外簡単に生徒たちの良からぬ行為を見つけることができるし、学校の中は既に自分の庭のようなものなので、いかがわしい物も色々と押さえてもいる。
スー
スー
ギシッ


しかし、それらを使うのはまた今度。今は無防備をさらす獲物で楽しませてもらうとしよう。
「う……んっ」
「おっと……小野先生、服を着たままでは寝苦しいでしょうね。今、脱がせてあげますよ」
スー
スー
ギシッ


綾香の体の傍に寄り、シャツのボタンをはずして、スカートをずりおろしていく。
一枚一枚丁寧に脱がせるたびに、徐々に露わとなる下着がいやらしい。
その光景がいやがおうにも興奮をかきたてる。
スー
スー
ギシッ
知らず知らずのうちに、ごくりと
生唾を飲み込む。
そして、綾香は残り一枚の布を残す
のみとなった。

「これは介抱ですからね……おほっ」
まるで写真で微笑む恋人への言い訳のように、白々しい台詞を吐く。
プルン♡
スー
スー
「ピンクの下着かぁ……小野先生にピッタリの可愛らしい下着だな。
でも、パンツはちょっと透けてて、マン毛が見えてエロい。
それに、隠しきれない巨乳……服の上からでも目立っていたが、脱がすとさらに凄い」
パサッ

綾香もまさかワシに下着をマジマジと見られることになるとは、夢にも思っていないだろう。
「そういえば、いつだったか……男子生徒がブラチラがどうのと言って、はしゃいでいたな。確かに、こんなカワイイ先生の下着なんか見たら、性欲の塊である生徒たちのテンションが上がらんはずがないな」
柔らかい生地の下着は触り心地もよく、その下の肌の柔らかさと相まってクセになる。
プルンッ♡
スー
スー
パサッ

「顔良し、性格良し、スタイル良しと文句の付け所がない。さぞや、付き合うときの競争率は高かっただろうなぁ」
プルン♡
スー
スー
まず、自分では絶対に勝ち目のない競争だ。しかし、それは正攻法でのものであり、裏道を使えばあっけなく物にすることができる。
パサッ
「さて……じゃあぁと2枚の布も剥ぎとらせてもらおうかね」

「彼氏さん、これも介抱だから(笑)　裸健康法とかあるでしょ?」
プルン♡
スー
スー
そう言いつつ、綾香を生まれたままの姿へと変える。
恋人の写真を目の前に行うその行為は、異常な背徳感に感じられ、まだほとんど何もしていないというのにち○ぽは硬くなっていた。
パサッ